



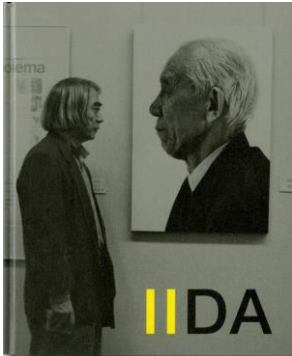
町田市立国際版画美術館 展覧会図録

【 2006年 ~ 1997年 】

- ・お申し込みは希望図録名を明記のうえ、現金書留で当館まで代金をお送りください。
その際、図録代は現金、送料は切手をお願いいたします。現金書留の料金はおお客様でご負担下さい。
- ・2冊以上お申し込みの場合の送料についてはお問い合わせ下さい。

飯田善國 -版画と彫刻-

展覧会 2006/9/30~11/26



飯田善國（1923-2006）は、色鮮やかなロープとステンレスの立体を組み合わせた彫刻や動く彫刻など、常に新しい表現に挑戦してきました。手がけた公共彫刻は、国内外併せて40点以上にのぼります。中でも東京都町田市の、《彫刻噴水》は、最大級の規模です。柱状の翼がリズムカルに動き水が流れてゆくさまは、感動と安らぎを与えてくれます。

彼はまた、版画制作にも取り組みました。1950年代末、ウィーン留学中のことです。画家を志して旅立ったものの、いかなる造形へ進むべきか暗中模索する中、初めて銅版画を試みたのです。

本展では、このウィーン時代の版画から始まり、詩画集『クロマトポイエマ』（1972年）および『M. M. 曲面シンドローム』（1992年）を中心として展覧します。これらは作者が独自に考え出した「言葉・色・かたち」を結ぶ独自のルールに基づいて構成されています。『クロマトポイエマ』は西脇順三郎の英文詩をゲームのような感覚でカラフルに視覚化したものです。また『M. M. 曲面シンドローム』はマリリン・モンローの写真と言葉によって構成され、その色彩と形態の奥底に知的なユーモアとエロスを漂わせています。

本展は、飯田善國の版画と、関連の深い彫刻や絵画、素描併せて約160点により、その芸術の真髄に迫ります。国際的に活躍した彫刻家であると同時に詩人でもあった飯田善國。彼が長く住み慣れた東京都町田市と生まれ育った栃木県足利市とを会場に、2006年4月に惜しくも急逝した作者を追悼いたします。

図録目次

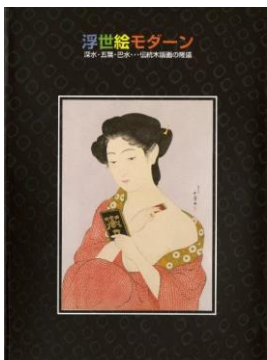
「原型」へ向かう意思 青木健 / 距離を抱擁する-飯田善國試論 川島健二 / 図版 / 飯田善國による飯田善國-1988 山田敦雄 / 自我を超えて-飯田善國の苦闘とヴィジョンの到来 滝沢恭司 / 飯田善國の版画 高木幸枝 / 年譜 / 文献

図録体裁

■発行日：2006/9/30 ■頁数：142ページ(カラー52ページ) ■サイズ：250mm×205mm ■重量：610g

図録価格 1,000円 送料 350円 (切手をお願いします)

浮世絵モダン 深水・五葉・巴水…伝統木版木の隆盛 展覧会 2005/10/8~11/23



浮世絵は江戸時代の町人大衆が彼らの趣味の下に創り出した美の世界です。当時の名所の風景や人気芝居の役者、評判の小町娘を描いた多色摺り木版画は錦絵と呼ばれ、その表現、版画の技術は一つの頂点に達しました。

しかし明治日本の文化界はあまり錦絵に関心を抱かず、むしろその魅力を発見したのは西洋の人々でした。幕末以来、西洋に渡った浮世絵や種々の工芸品は英・仏諸国で日本趣味の流行、いわゆるジャポニズムを惹き起こしました。好奇心からの浮世絵蒐集にとどまらず、西洋絵画に行き詰まりを感じていた画家のなかには、錦絵の斬新な表現に触発され、絵画の新しい可能性を見出した人々もおりました。

一方、わが国の木版画界は文明開化の主題を取り上げたり、新聞雑誌、書籍の口絵、挿絵などに活路を見出したものの、石版や写真印刷の登場に取って代わられ衰退へと向います。それでも明治40年代にはようやく伝統的木版画を見直す気運が生まれ、また西洋人の浮世絵蒐集熱を背景に、渡辺庄三郎らの伝統的方法による新しい錦絵制作が企画されるようになりました。渡辺は、伊東深水、橋口五葉、川瀬巴水らの協力のもと、彫師・摺師との協業で新趣向の多色摺り木版画をつぎつぎと世に送り出します。これを契機として大正から昭和にかけて制作された伝統的木版画による作品の数々を、本展では渡辺新版画を中心に〈浮世絵モダン〉の世界として紹介し展示いたします。

図録目次

浮世絵モダンの系譜-近代の伝統木版画界と新作版画の出版- 岩切信一郎 / 図版 / 渡辺庄三郎の夢-「新版画」の成立について 西山純子 / 浮世絵モダンと時代精神-大正の叙情から昭和モダンへ 滝沢恭司 / 浮世絵モダン関連年表 / 作家解説 / 出品目録

図録体裁

■発行日：2005/10/8 ■頁数：112ページ(カラー24ページ) ■サイズ：250mm×205mm ■重量：380g

図録価格 850円 送料 300円 (切手をお願いします)



マルチプル-それは、同じものが複数つくられた作品のことを言います。広義には版画も含まれますが、狭義にはおもに立体的な作品を指します。この展覧会では立体的なマルチプルに焦点をあてて、ユニークで楽しい作品の数々を展示し、20世紀以降の美術の一側面をご紹介します。

フランスの美術家マルセル・デュシャンは、それまでは美術の制作に決して用いられなかった素材を全く自由な発想で取り入れました。彼に影響を受けたマン・レイやメレット・オッペンハイム、わが国にシュルレアリスムを紹介した瀧口修造や岡崎和郎、加納光於たちもこれに取り組みます。デュシャンの影響はまた、芸術運動「フルクサス」へも波及してゆきます。

マルチプルの制作には工業生産の技術も導入され、それによって美術家の側にも観客の側にも新しい展開が生じました。美術家たちは既成の概念にとらわれることなく、思い思いの作品のかたちに取り組んでゆきます。その制作現場となる工房の技術力や機動力にも支えられ、マルチプルの形態は実に多種多様なものになりました。また一方では、1点ものの作品よりは廉価なために多くの愛好家を生み、幅広い収集家に受け入れられてゆきました。

この展覧会は全体を3章で構成し、時代とともに変貌したマルチプルのさまざまな姿をご紹介します。

図録目次

戦後、美術の大衆化の中で-マルチプルと瀧口修造 杉野秀樹 / 図版 / アメリカの版画工房とマルチプル-エピソードから
高木幸枝 / 主要作家解説

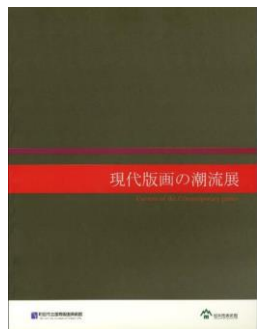
図録体裁

■発行日：2005/4/9 ■頁数：120ページ(カラー60ページ) ■サイズ：250mm×205mm ■重量：700g

図録価格 1,250円 送料 350円 (切手でお願ひします)

現代版画の潮流展

展覧会 2005/2/26～3/27



思いおせば山本鼎が美術文芸誌『明星』に「漁夫」を発表したのが1904年のことでした。わが国の創作版画運動の嚆矢と目されるこの版画は、旧套を脱して版のしごとを美術の地平へと築き上げようとしたものでした。山本にはじまる自画、自刻、自摺の志向はさまざまな活動を巻き込みながら、わが国に独特の版画を育み続け、戦後から今日まで国際画壇に華々しい成果を誇るまでに発展してきました。

特筆すべきことは、この100年の間どの版画家も優れて普及家、啓蒙家であった点です。もとよりこの国の風土やそこに培われた国民性が、版画に合う手技と感性を伸張させるのに効果があった事はいまでもありませんが、版画家が作品を通して時代を証言するばかりではなく、自らと自らの作品を語りまた積極的に後進を指導して来た点です。特に戦後は大学等高等教育機関に版画が正課として組み込まれて以来はそれが顕著でした。先人達が獲得したものを、次世代への創造の糧として伝え生かすことへの意志が強く働いていたことを見逃すことは出来ないでしょう。

この展覧会は版画04～05特別企画として戦後の現代版画に焦点を絞り、その版画芸術の継承と展開の系譜を潮流にたえてご覧いただくとするものです。

図録目次

現代版画のナショナルとは…考 米倉守 / 現代日本版画レポート-問題提起、歴史、教育- 滝沢恭司 / 図版 / 資料 (略歴・指導歴・出品リスト・索引)

図録体裁

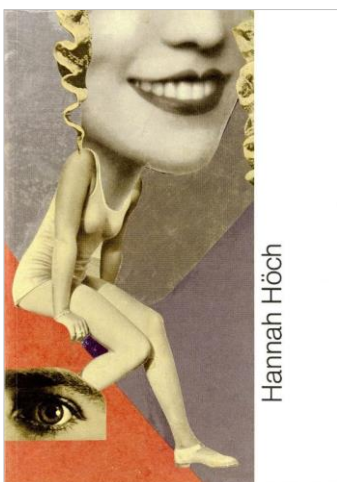
■発行日：2005/2/27 ■頁数：124ページ(カラー80ページ) ■サイズ：290mm×220mm ■重量：670g

図録価格 800円 送料 350円 (切手でお願ひします)

ハンナ・ヘーヒ

コラージュ

展覧会 2003/6/14～7/13



ハンナ・ヘーヒ (1889-1978) は20世紀ドイツ美術のなかで、近年ますますその重要性が高まってきている作家です。ゴータという地方都市に生まれ、1912年、23歳のときにベルリンの美術工芸学校に入り、グラフィック教室を担当していたエミール・オルリクのもとで勉強を開始しました。

1910～20年代のベルリン、それは第一次世界大戦からヴァイマル共和国の誕生へと推移する時代に、台風の目のような役割を果たした大都会でした。政治的動乱、大衆文化の爛熟、新たな芸術運動の胎動…この街にはすべてがありました。そこでヘーヒが出会ったのがラオール・ハウスマンです。彼女はハウスマンとともに、あらゆる既成の価値観や芸術概念に反旗を翻す「ベルリン・ダダ」の推進力となっていきます。また二人は、フォトモンタージュという新たな表現手法と取り組みます。これは、雑誌や新聞・広告など、様々な媒体の画像を自由に切り貼りし、まったく別の次元の作品に仕上げるという、実にダダ的・革新的手法で、今日ではコラージュの一分野です。ヘーヒはこれによって、時代への鋭い批判を込めた作品を発表しました。また1920年代にはクルト・シュヴィッターズを通じて多くの前衛芸術家と親交を結び、シュルレアリスムや実験的写真・映画などの影響を受け、さらに新たな展開を見せました。

コラージュはヘーヒの生涯を通じて一貫して実践された重要な手法で、油彩・水彩を含めた戦後の総合的な再評価のきっかけとなりました。子どもや女性、動・植物など、日常的で穏やかなイメージの断片が詩情やユーモアを醸しだしていますが、鋭い造型感覚によって無機質なモチーフと組み合わせられた時に生まれる奇怪な画像-そこには現代人の誰もが抱えている漠とした不安、恐怖感までもが映し出されるのです。それは政治情勢や機械文明への不安であったり、大衆消費・マスコミュニケーション時代が生み出すストレスなのかもしれません。人種や性による差別への異議申し立てでもあります。彼女のコラージュは多面的な相貌をみせる万華鏡のようでありつつ、夢でみた光景のような忘れがたい美しさをも獲得しています。

本展では1920年代から60年代にいたるコラージュ作品34点余を紹介し、これは、1974年に京都で日本初の回顧展が開催されて以来、実に約30年ぶりのまとまった展示であり、社会の激しい変動に動じることなく誠実に自己の創作と取り組みつづけたヘーヒの重要性を再認識する機会となることでしょう。

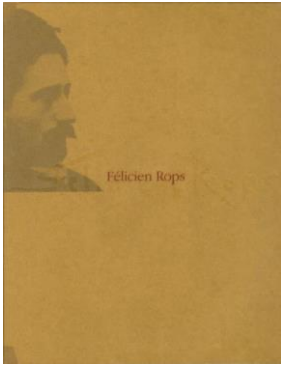
図録目次

伝記と資料 ゲッツ・アドリアーニ / ハンナ・ヘーヒの作品における図像象徴 エバーハート・ロータース / ハンナ・ヘーヒ、疑問符付きの「しっかり娘」 カーリン・トーマス / ハンナ・ヘーヒのコラージュの逆説と詩情 ペーター・クリーガー / 出品リスト / 略年譜 / 図版

図録体裁 (独逸版+日本語訳、英語版+日本語訳)

■発行日：2003/4/12 ■頁数：134ページ(カラー30ページ) ■サイズ：235mm×165mm ■重量：650g

図録価格 1,000円 送料 350円 (切手でお願ひします)



19世紀美術史にその名をとどめるフェリシアン・ロップス（1833-1898）の版画、素描、油彩画等135点による、日本で初めての大規模な回顧展を開催いたします。

ベルギーのナミュールに生まれたロップスは、15歳で実業家の父を亡くし、若くして莫大な財産を受け継ぎました。23歳でその財産をもとに『アイレンスビーヘル』誌を創刊、自らもリトグラフによる卓抜な風刺画を寄稿しました。1864年、31歳のときに晩年のシャルル・ボードレーールとベルギーで出会い、これ以後ロップスの芸術は大きく開花していきます。1874年、41歳のロップスはパリに永住することを決め、挿絵画家として数多くのフランスの文学者とかかわっていくなかで、その特異な才能を高く評価されました。パリの街にたたずむ娼婦の姿をとらえた作品や、聖職者を揶揄する作品、悪魔や官能的な作品を描き、独自の芸術世界を展開する一方で、旅行好きだったロップスは、各地で風景画を制作しました。

日本では、創作版画の流れの原点ともいえるべき美術芸雑誌『方寸』で1910（明治43）年にロップスの紹介記事が掲載されたほか、1913（大正2）年の『白樺』で大きく取り上げられ、文学者たちを中心に早くから注目されてきました。しかし昭和以降の日本では、ロップスの挑発的とも言つてよい側面、すなわち官能的で悪魔的な主題がことさらに強調されたのも、否めない事実です。この展覧会を通して、ロップスが卓越した技術を有する版画家であり、官能的な作品だけでなく多くの風景画も残していることなど、従来の日本ではほとんど知られていなかった新たな一面もご理解いただけるものと思います。

図録目次

フェリシアン・ロップス 陶酔に生きて ベルナデット・ボニエ / <地獄>のエロティシズム J. K. ユイスマンズ / 図版 /

日本でのロップスの紹介 大河内菊雄 / 主要参考文献 / 年譜 / 技法についての用語解説

図録体裁

■発行日：2002/4/20 ■頁数：208ページ(カラー130ページ) ■サイズ：280mm×220mm ■重量：870g

図録価格 1,200円 送料 560円(切手でお願ひします)



版画はその歴史の初めから、人々の生活とともにありました。祈りを捧げるよすがとして、お守りとして、大事にされた版画もあります。またニュースを伝えたり、さまざまな意見を主張したり、宣伝したり、そんなときにも版画入りのピラが飛び交いました。そしてまた、部屋を彩る壁紙や、ゲームをして遊ぶカードや双六も版画でした。子どもたちには版画で刷った絵本や歌の本が喜ばれました。切り抜いて作る人形や、家や乗物など、さまざまな紙の遊び道具もありました。

こんな風に、人々の日々の暮らしに密着した版画を民衆版画と呼びます。その多くは無名の職人たちによって作られたものです。稚拙だけれど素朴で力強い線が特色で、鮮やかな色を塗られた例も多くあります。版画がヨーロッパで産声をあげた頃（15世紀頃）の古拙な作り方、作風を受け継ぐものであります。このような民衆版画は、たとえばデューラーやレンブラント、ピカソなどなど、名高い美術家が手がけた版画とは違う、もうひとつの世界を形づくってきました。その生き生きとした造形は今日の私たちの目もひきつけ、楽しませてくれることでしょう。

当館ではこのたび、フランスを中心とした民衆版画約90点を一挙に公開いたします。これはおそらく我が国でも初めての規模の大きい民衆版画展となります。

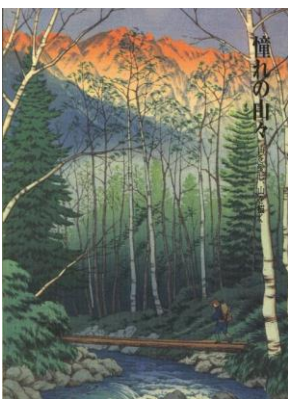
図録目次

「民衆版画」について 佐川美智子 / 図版 / 出品リスト

図録体裁

■発行日：2002/2/23 ■頁数：44ページ(カラー24ページ) ■サイズ：240mm×200mm ■重量：870g

図録価格 475円 送料 215円(切手でお願ひします)



「山々」は、聖域として仰ぎ見られていた時代から、絵画の対象とされてきました。18世紀中頃より南画家の人々によっておこなわれていた写生を通じて、東洋画の中にも「実景を写す」という姿勢の兆しがみられるようになります。そこではまだまだ様式的な表現を拭いさることはできませんでした。それが近代になると、来日していた西洋の芸術家たちの影響を受けた、我が国の洋画家の人々によって、風景が重要な画題の一つとなります。風景画の中で山岳風景画が重要な位置を占める傾向は、近代における自然観を背景にしています。明治10年代頃より近代登山が起り、明治38（1905）年には、小島鳥水はウォルター・ウェストンの紹介で、英国山岳会の承認を得て山岳会（後の日本山岳会）を設立しました。このような登山ブームの高揚とともに山岳風景画の制作もより活発化します。昭和6（1931）年の国立公園法の制定は、この傾向により拍車をかけ、山岳風景画は精神的な解放と憩いの空間を作り出す絵画として定着していったのです。

風景画の中でも「山」に焦点をあてた今回の企画は、江戸の趣を残しつつも近代に生きた画家たちの存在を、「近代風景画の残映」としてとりあげてみました。次に「近代風景画に見る山々」として近代風景画の先駆をなした鹿子木孟郎をはじめとする不同舎の人々、とりわけ山岳版画を多数残した吉田博、水彩画に新たな世界を開き、普及にも力を注いだ大下藤次郎、山岳風景に限りない愛着を示した足立源一郎の作品を骨格にして、近代洋画家たちにとって山はどのような写っていたかを考えてみることにしました。次に「版画家が描いた山々」はどのようなものであったのか、「創作版画」、「新版画」それぞれの相違を提示する中から風景（山岳）版画の幅広い世界を紹介いたします。

図録目次

憧れの山々を描くようになるまで 青木茂 / 山を彩る光 大谷一良 / 相模野-小島鳥水を偲んで 寺田和雄 / 図版 /

作家解説 / 出品作品リスト

図録体裁

■発行日：2001/8/4 ■頁数：124ページ(カラー40ページ) ■サイズ：295mm×210mm ■重量：680g

図録価格 1,000円 送料 350円(切手でお願ひします)



20世紀最後の年、2000年がやってきました。世紀の変わり目は、古くから社会にも人間の心にも影響を与えてきました。「この世の終わりと新たな世界のはじまり」を待望する気分、それは世紀末に特徴的な現象ともいえます。しかしそれは、時代ごとの社会情勢や宗教の動きと密接に連動するものでもありました。本展ではこのような終末的な考え方や現象が、美術作品にどのように現れてきたのかを版画を通じてさぐります。

キリスト教の思想に根ざした西欧の社会では、聖書がいつも重要な心のよりどころとなってきました。なかでも聖書の最後にある黙示録は、終末的な思想と深く結びついています。黙示録は中世以来、彫刻や写本によって視覚化されてきました。本展ではまず、15世紀末～16世紀に作られた木版画による黙示録を取りあげます。マティアス・ゲールング(1500-1570)の木版画連作『黙示録』は、宗教改革期の思想を反映し痛烈な諷刺に満ちています。このユニークな作品59点と、その偉大な先達、アルブレヒト・デューラー(1471-1528)の『黙示録』を展示し、今から500年ほど前に版画で描かれた黙示録の世界をご覧ください。

近代の画家たちもまた黙示録や終末思想と無縁ではありません。ウィリアム・ブレイク、ジョン・マーティン、ギュスターヴ・ドレ、オディロン・ルドン、ジェームズ・アンソールらは、終末と再生、生と死と永遠といったテーマをめぐって思索し、作品を残しました。画家の手は、見慣れたはずの風景を、劇的な終末の風景や光に満ちた彼方の世界に変貌させ、いるはずのない生き物を闇のなかに浮かび上がらせます。目に見えないものにかたちを与え、ありふれた日常の光景に思いもかけない亀裂を生じさせること、それこそが造形美術の面白さのひとつといえるでしょう。

現代でもそうした幻想的光景はさまざまなジャンルの造形表現に受け継がれています。本展の作品群は、20世紀末を生きた私たちが心に抱く終末的なヴィジョンの根源ともいえましょう。さらにそれは、世紀末という区切りを超えて、人間存在の根底にかかわる普遍的なテーマとして受け継がれてきたこともまた事実なのです。

図録目次

黙示録美術の系譜 西洋中世における天国のイメージの追求 安發和彰 / 黙示録としての宗教改革 マティアス・ゲールングの木版画連作 ペトラ・レティヒ / ウィリアム・ブレイクの銅板画集 ダンテの『神曲』 霊界についての伝統と独創の表現 橋秀文 / 図版 / 主要参考文献

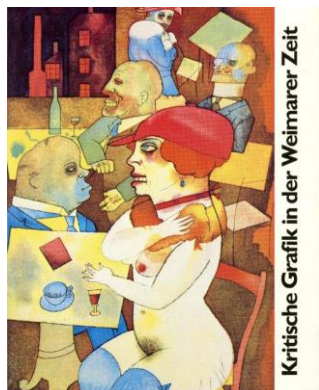
図録体裁

■発行日：2000/4/15 ■頁数：196ページ(カラー10ページ) ■サイズ：260mm×185mm ■重量：580g

図録価格 1,250円 送料 350円(切手でお願ひします)

ワイマール時代の諷刺画

展覧会 1999/8/28～9/26



この展覧会は、第一次世界大戦敗北によるドイツ帝国崩壊後、1919年に成立したドイツ共和国憲法、すなわちワイマール憲法に象徴される、ワイマール時代(1919-33年)の歴史、社会、風俗を当時の諷刺的な版画および水彩画、ペン画によって語らせようと企画・構成されたものです。

当時の芸術家たちは、戦争で心に傷を負い、さらに期待を寄せた共和国治世下の現実を目の当たりにして深く絶望しました。絶え間なく激化する対立の様相や社会矛盾に憤りをおぼえた彼らは、政治・社会的にも、また芸術的にも批判的態度も表明します。ジョージ・グロスは兵隊、娼婦、酔漢をブルジョワ階級と並べおき鋭い線で描きだしました。オットー・ディクスはより直截に戦場での乾いた現実を刻印し、ケーテ・コルヴィッツは静かにそして強く戦争と死に對して目を凝らします。

日本ではプロレタリア美術の中で既に1920年代からグロスを中心に当時のドイツ美術の画家たちが紹介されていますが、今日ではその範疇を越え20世紀ドイツ美術を代表する作家として重要な位置を占めております。

本展では、20年代ドイツ民主主義の構相がいかに脆い基盤のうえに築かれており、どのように対立・矛盾の様相が露呈されていったのか、そしてナチスの台頭とともにいかに崩壊していったのかを、ワイマール時代に現れた美術の動向とおして再考します。24人の作家が描いた「線による怒りの芸術」-版画と水彩画、ペン画-146点によって、ワイマール時代の厳しい現実が明らかにされます。

いま、われわれも異なる過去の回顧ではなく、われわれが対峙せねばならぬ問題を現前化しているのではないのでしょうか。本展が、そのことを深く見つめ直す機会となれば幸いです。

図録目次

ワイマール共和国：ドイツ初の民主主義の成立条件、危機、挫折 エーバーハルト・コルプ / 武器としての線 エーバーハルト・ロータース / 新即物主義-1920年代のドイツ的リアリズム ヴィーラント・シュミット / 文化、政治、経済、社会状況比較年表 / 作家略歴 / 出品目録 / 図版

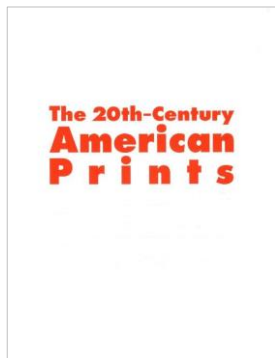
図録体裁(独逸版+日本語訳、英語版+日本語訳)

■発行年：1999 ■頁数：226ページ(カラー8ページ) ■サイズ：280mm×225mm ■重量：1320g

図録価格 1,000円 送料 560円(切手でお願ひします)

20世紀のアメリカ版画

展覧会 1999/4/17～6/20



今世紀初頭、「ジ・エイト」と呼ばれる8人の画家グループは、発展しゆく都市の情景や庶民の生活などを、積極的に描いて注目を集めました。その代表者ロバート・ヘンライに影響を受けたジョン・スローンやエドワード・ホッパー、さらには美術学校「アート・ステューデント・リーグ」で彼らの指導を受けたレジナルド・マーシュ、国吉康雄、ベン・シャーンらも数多く版画作品を制作しています。

こうしたアメリカ版画に一大転機をもたらしたのは、第二次世界大戦で亡命してきたスタンリー・ウィリアム・ヘイターとヨーロッパの作家たちでした。ヘイターがニューヨークに開設した版画工房では、エルンスト、ミロ、タンギーといった作家ばかりでなく、ジャクソン・ポロックらアメリカ出身の作家たちも貴重な作品を残しています。

戦後になってアメリカの美術は、一躍、世界の檯舞台へと上ります。その一方で、タマリンド石版工房やULAEといった版画工房の登場が、新進気鋭の作家たちと版画とを親密に結びつけてゆきました。ジャスパー・ジョーンズやロバート・ラウシェンバーグ、ポップ・アートの作家、そしてさらに若手の作家たちが次々に重要な作品を制作しました。新しい考え方や技術を導入した制作現場では、組織的なスタッフ構成で「コラボレーション(共同制作)」がなされ、現代アメリカ版画は、その規模や量などのあらゆる面において、まさに世界の版画制作をリードしてきたのです。

この展覧会では、「20世紀前半の版画」「ヨーロッパの影響と現代への胎動」「現代版画の発展」の三部構成でアメリカ版画の歴史をたどり、多くの作品を生み出したアメリカの版画工房と版画の未来を模索しようとするものです。

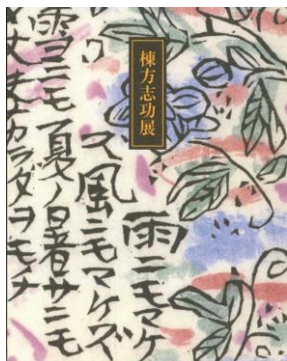
図録目次

20世紀アメリカの美術 広本伸幸 / 「ジ・エイト」と今世紀前半の版画 高木幸枝 / 図版 / ヘイターのニューヨーク時代とその後のアメリカ版画 杉野秀樹 / 図版 / プリント・リバイバルと版画工房 木戸英行 / 図版 / 作家生没年 / 版画の技法・用語解説 / この図録に登場する主な版画工房 / 主要参考文献 / 出品リスト

図録体裁

■発行日：1999/4/17 ■頁数：160ページ(カラー96ページ) ■サイズ：295mm×225mm ■重量：640g

図録価格 1,250円 送料 350円(切手でお願ひします)



「ワだば、ゴッホになる」と誓って上京し、画家を目指した棟方志功。独学で帝展入選を果たしますが、後に版画家に転身して世界の「ムナカタ」へと飛躍します。本展覧会では、棟方の制作活動の重要な根幹を成した文学と仏典に題材を求めた作品に焦点を絞って開催します。

棟方志功は、1903（明治36）年青森市生まれ。版画制作を始めてからは、文学者との交流、柳宗悦、河井寛次郎ら民芸運動の指導者との出会いを通じて、独特な棟方芸術の世界を創り上げました。文学への関心は特に強く、戦前は佐藤一英や宮沢賢治、蔵原伸二郎、戦後には保田興重郎や吉井勇、谷崎潤一郎、草野心平らの詩歌や小説を版画の題材としました。自らも詩や歌を詠んで版画の作品としています。棟方は、板の生まれた性質を大切に、板を彫って魂を引き出すという意味から版画を「板画」と称しました。

1955（昭和30）年、サンパウロ・ビエンナーレ版画部門最高賞を受賞、翌年にはヴェネツィア・ビエンナーレで国際版画大賞を受賞し、海外でも高い評価を得ました。1970（昭和45）年には、毎日芸術大賞を受賞、同年、文化勲章を受章しています。その旺盛な創作意欲は晩年になっても衰えを知らず、1975（昭和50）年に世界するまで膨大な数の作品を制作しました。

本展では、文学と仏典に題材を求めた作品40数点を展示することにより、文学、仏典を中心にした棟方の精神世界、人間像に迫ります。

図録目次

跳人棟方に寄せて 青木茂 / 棟方志功の時代を読む 山田俊幸 / 1930年代の棟方讃歌-大衆路線の敷設 滝沢恭司 / 図版 / 年譜 / 文献 / 索引

図録体裁

■発行日：1998/10/3 ■頁数：142ページ(カラー58ページ) ■サイズ：295mm×225mm ■重量：800g

図録価格 1,150円 送料 350円(切手でお預いします)

フランク・ステラ/ケネス・タイラー 構築する版画

展覧会 1998/6/20~7/26



フランク・ステラ（1936-）はアメリカ現代美術のみならず、今日の世界のアート・シーンを代表する作家のひとりとして知られています。彼の作品は、ストライプを描いた初期の禁欲的な抽象絵画から過剰なまでの色彩と形態が氾濫する近年の仕事まで、華麗な変貌を遂げながら、絵画、彫刻、建築といったさまざまなメディアを横断しつづけてきました。なかでも版画は、その制作プロセスが彼の他のすべての作品に影響を及ぼしているという点で、ステラ芸術にとってなくてはならない存在です。そしてこれを技術的に支えてきたのが刷り師ケネス・タイラーでした。二人は1967年以来今日にいたるまで、互いに密接な共同制作者としての関係を保ちながら版画芸術の世界で革新的かつ先端的な作品を生みだし、今なお数々の新しいプロジェクトに挑戦しつづけています。

本展はステラの進化と革新性に満ちた版画作品を概観し、彼の版画制作の歩みを検証しようとするものです。展覧会では、1967年にステラがタイラーに勧められて初めて本格的に版画制作に着手した<ペルシャの星シリーズ>にはじまり、<不整多角形>シリーズ（1974年）、<エキゾチック・バード・シリーズ>（1977-79年）、<サーキット・シリーズ>（1982-84年）、<スワン・エングレイヴィング・シリーズ>（1982-85年）、<白鯨>シリーズ（1991-93年）など、ステラとタイラーのコラボレーションによる代表的なプロジェクトが展示されます。また展覧会のもうひとつの核となるのが、ケース・スタディーとして紹介する新作シリーズ<イマジナリー・プレイズ>（1995-97年）です。ここでは、最終的な完成作が生みだされるまでに制作されたさまざまな試刷りや版、コラージュなどの資料を通してその制作の秘密に迫ります。

図録目次

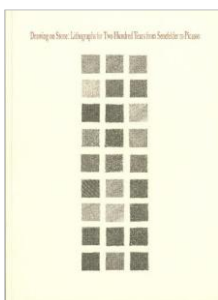
フランク・ステラ-ジュアム島への船出 広本伸幸 / タイラー・グラフィックスにおけるフランク・ステラ-想像上の場所と現実の技 シリ・ イングバーク / メルローズ・アヴェニュー フランク・ステラ / 図版 / ケース・スタディ：ジュアム / 用語解説 / 年譜 / 参考文献

図録体裁

■発行年：1998 ■頁数：140ページ(カラー48ページ) ■サイズ：300mm×300mm ■重量：1200g

図録価格 1,400円 送料 560円(切手でお預いします)

石に描く-石版画の200年 ゼネフェルダーからピカソまで 展覧会 1998/4/18~6/14



石版による印刷術が考案されて、今年ではほぼ200年が経過しました。ドイツ人アロイス・ゼネフェルダーは自作の戯曲等の印刷のためにこの印刷術を考案しました。しかし、のちの展開を顧みると、文字の印刷よりも、画像の印刷の面での貢献が大きいことがわかります。

石版は、木版や銅板と異なり版面を彫ったり削ったりしません。平らな石の面に、あたかもデッサンするのと同じ調子で描きさえすれば版画が生まれます。まるで魔法のような印刷術です。画家が早くからこの技法に注目したのも当然といえましょう。考案された200年前から今日に至るまで、各時代の巨匠たちが石版画の名作を残してきました。ゴッヤ、ジェリコー、ドラクロワといったロマン主義の画家、19世紀後半から高まる「画家の石版画」の流れで中心的な役割を果たしたマネやルドンなど、さらに色彩豊かな石版画やポスター芸術が開花した世紀末、20世紀美術を代表するマティスとピカソ、そして第二次世界大戦後のアメリカの作家たちまで、多くの画家がこの技法の表現に魅了され、版画の分野に輝かしい石版画の歴史を築いてきました。

石版印刷術の考案200年を記念して開催する本展覧会では、石版の興隆がどのような時代背景を伴っていたかがわかるように、8つの時代に区分しました。そして、各時代を代表する作品を展示し、今日までの石版画の流れを振り返ってみたいと思います。

図録目次

石に描く (Drawing on Stone) とは 杉野秀樹 / 図版 / 刷り師の役割-石版の制作過程 / 主要参考文献

図録体裁

■発行日：1998/4/18 ■頁数：164ページ(カラー69ページ) ■サイズ：300mm×210mm ■重量：710g

図録価格 1,000円 送料 350円(切手でお預いします)



日本文化は型の文化であるといつて過言ではありません。平安時代に成立した和歌は「五・七・五・七・七」の定型句の中に言葉をいれて、心情や情景を歌いあげるものであり、中世前期にはじまった能と狂言も定まったストーリー中で演者の表現力を発揮させるものです。そして近世初期には確立されていた茶道や華道、香道、武士道など道は作法であり、一定の型です。作法のなかで美しさと優雅さを認めるものです。

美術品にしてもそれぞれの「かた」=スタイルの中で作られています。仏教美術では、例えば阿弥陀如来像というイコノグラフィックがあつて、それぞれの時代にそれぞれの個性を見いだします。絵巻物も詞書と絵、そして右から左への展開という中で、それぞれの内容を見事にあらわします。水墨画には水墨画のスタイルがあり、浮世絵には浮世絵の定義があつて私達は美術を鑑賞します。知らず知らずのうちに、美術品をひとつの「かた」にはめて見ているようです。

美術品には作られる「表現」という二面性があります。私達が「素晴らしい」とか「美しい」と美術品を前にして声を発するのはこの表現の方に感動するからです。この度の「名品でたどる-版と型の日本美術」展では、表現もさることながら、作られた技の方に焦点を当ててみました。

図録目次

古代・中世の版と型 濱田隆 / 拓版画の系譜-木拓正面版について 中野三敏 / 版・型の相関図略年譜 / 版と型の略年表 / 図版 / 版と型の用語ミニ解説 / 版の系譜 / 版の大きさ図解 / 版と型の作り方イラスト / 出品目録 / 協力者一覧

図録体裁

■発行日：1997/4/19 ■頁数：230ページ(オールカラー) ■サイズ：275mm×215mm ■重量：960g

図録価格 1,400円 送料 560円(切手でお願ひします)